

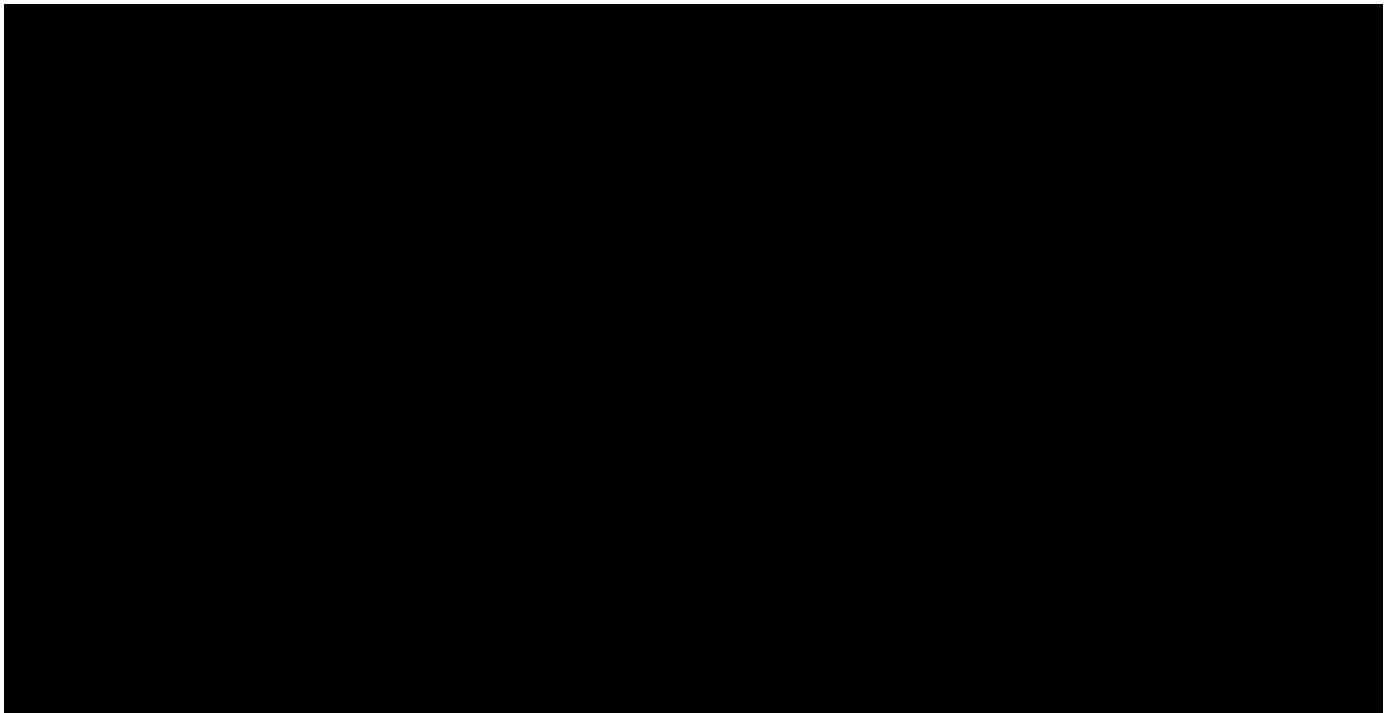


三田村家は有名な越前和紙を作っている旧家である。この大滝には天台宗の大滝寺があったが、天正三年(1575)、織田信長の武将、滝川一益によって堂塔は悉く灰燼に帰した。三田村家はこの寺跡に屋敷を建てた。

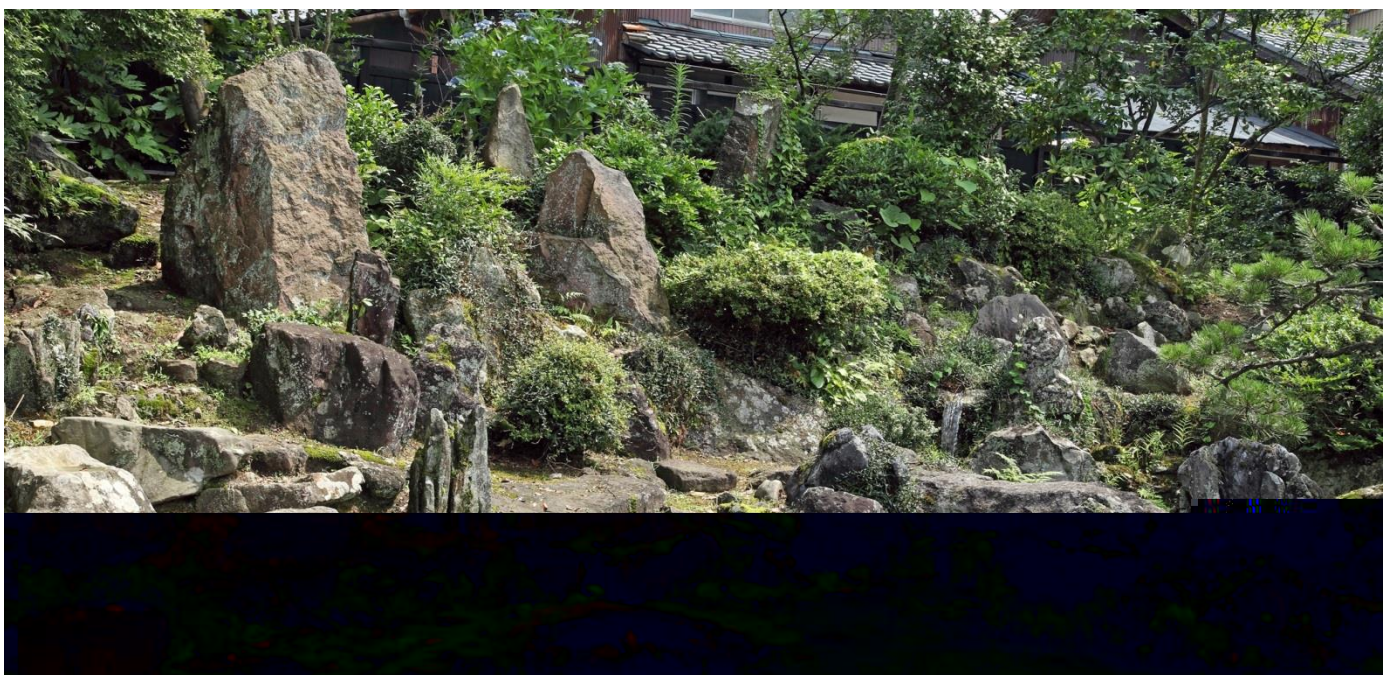
庭園は五角形をした池に中島があり、その左右に三つの石橋が架かっている。北側には大きな築山が作られ石柱が林立しているが、南側から奥まるにつれて石は順次小さく組まれていて遠近法の効果が発揮されている。

瀧は中島の左側にあるが、申し訳程度のデザインで、後世のこれ見よがしの大きさではない。中島に架かっている

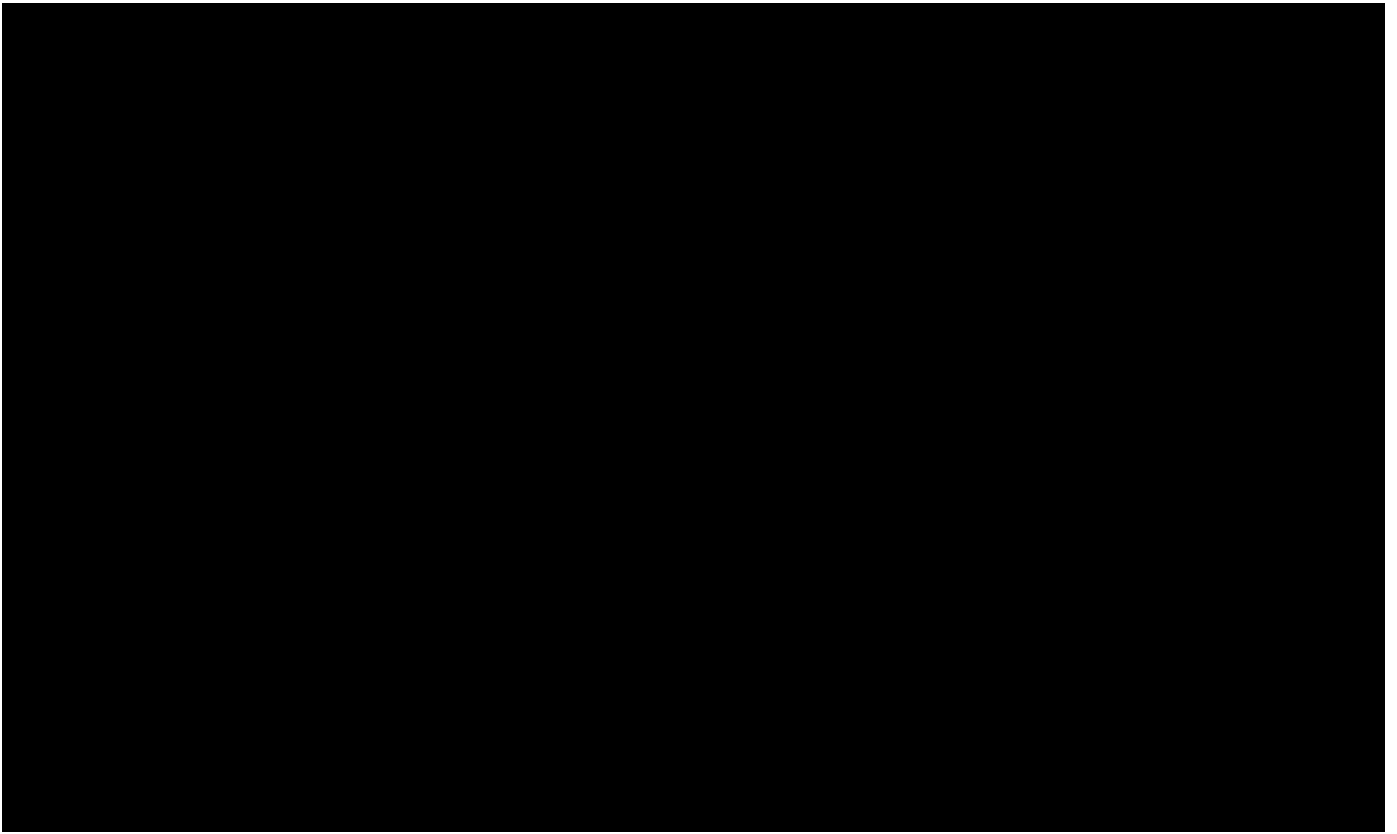
三つの石橋は銀閣寺の白鶴島に架かっている地割と同じ様式である。石橋は無骨であるが好感のもてる質実剛健な印象だ。



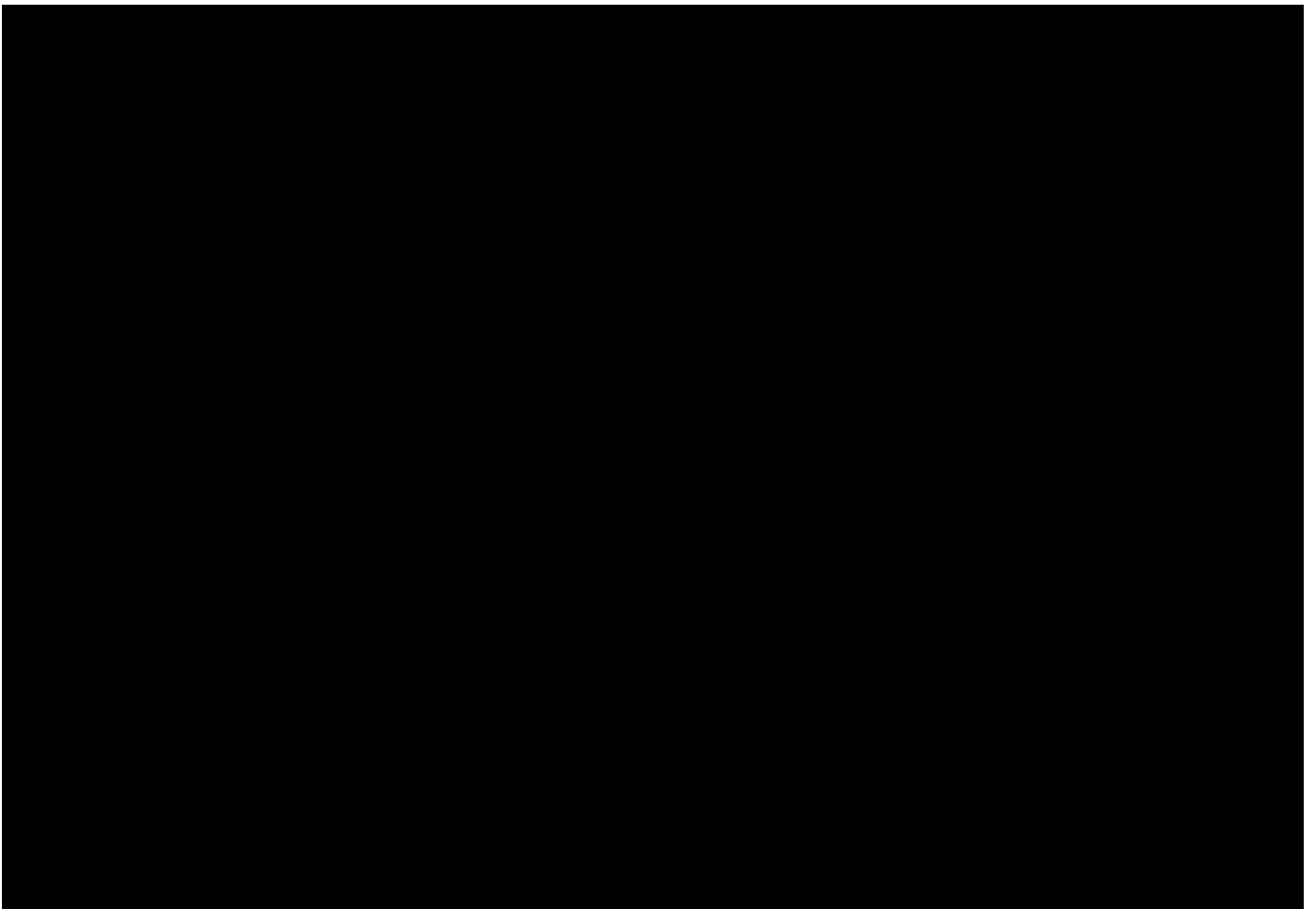
西側の書院から見た池泉の前景：池中の浮島や護岸の立石（両界石）が古式な様式を感じる。



北側築山に組まれている立石群は、手前が大きく奥に行くほど小さな石で構成されているため、奥行きを感じる石組みである。中島に架かる石橋の奥には控えめな滝が落ちる。



南側にあった旧書院からの景：正面には石柱が林立し、中島の手前には石灰岩による亀頭石状の石が目进行く。また写真右側には二石の橋が架かり、その奥には滝組が見える。



北側築山に組まれた石組み

技巧に走らない質実剛健な石組だ。稜角の鋭い巨石を無造作に組んだ印象を与えるが、作者のインスピレーションに従いスピード感を以て組まれたに違いない。また手前護岸にある合掌の形をした石組みは、東大寺二月堂の不空羂索観音立像の合掌の姿を思い出した。